

第三百四話 責めを東條大将のみに帰せられるか！

我が国では、長らく、対米英蘭開戦時の首相東條大将をヒトラーやムッソリーニと並ぶ独裁者と断じ、日本を無謀な侵略戦争に導いた戦争指導者として厳しくその責を問うてきた。陸相として強硬な陸軍を代表し、首相として開戦をせざるを得なかったのは事実だが、全ての責を氏に帰すべきか、大いに疑念のあるところだ。



1 東條英機大将経歴概要

1884 (M17) ~ 1948 (S23) 岩手出身 陸士 17 期 陸軍大将。陸軍次官、陸軍航空総監、陸軍大臣、参謀総長、内閣総理大臣 (第 40 代)、内務大臣、外務大臣、文部大臣、商工大臣、軍需大臣を歴任した。第二次世界大戦後に極東国際軍事裁判 (所謂東京裁判) で A 級戦犯となり、死刑判決を受けて処刑された。

東條内閣 (1941/10/18 ~ 1944/7/22) 在任中に対米英蘭戦開戦。

陸軍大臣と陸軍参謀総長をも兼任 (1944/2)、日本降伏後に拳銃自殺を図るが、連合国軍による治療により一命を取り留める。(173 話参照)

2 批判的な評

- ・ 懲罰召集・懲罰人事、強権的な政治手法、憲兵隊の恣意的運用による恐怖政治政治家への迫害等々
- ・ 剃刀とも呼ばれる能吏なれど、小人物 (石原莞爾) ・ 集団的政治発狂組合の事務局的 (司馬遼太郎) ・ 現場主義の権化 ・ 精神主義の鼓舞 (竹槍で B29 を) : 爵位狙い?
- ・ 冷酷無比な独裁者 ・ 無思想な権力者 ・ 戦争における戦略的ビジョンの欠如
- ・ 陸相時代に発布した戦陣訓 ・ 翼賛政治の推進 ・ 軍国主義のシンボル
- ・ 批判に対しては過剰反応 ・ 強硬な陸軍の代表者 ・ 東條幕府と擲擧 ・ 自決に失敗

3 好意的な評

委細は割愛するが、wiki には木戸幸一氏 (内大臣)、重光葵氏 (外務大臣)、徳富蘇峰氏 (作家)、井上寿一氏 (学習院大学長)、来栖三郎氏 (外交官)、山田風太郎氏 (作家)、西部邁氏 (作家)、バー・モウ氏 (ビルマ首相)、レーリンク氏 (東京裁判判事)、ヘンリー・S・ストークス氏 (英人ジャーナリスト) の好意的な東條評がある。

- ・ 昭和天皇の信任大
- ・ 天皇を守った忠臣 (172 話参照)
- ・ 天皇の意思を最優先 (白紙還元の御詔に対する取り組み 13 話参照)
- ・ 頭脳明晰・沈着冷静
- ・ 能吏・軍事官僚としては抜群
- ・ 軍紀・風紀遵守に厳正、民心把握に努力 (ゴミ箱あさりの逸話)
- ・ 温かい人情味溢れる人物 (人情宰相)
- ・ 航空に関し高い関心有す

4 ヒトラーやムッソリーニに擬せられては東條首相も可哀想だ。彼らのような絶対独裁者と、日本的集団指導体制下のリーダーでは自ずと出来る事が異なる。欧米の戦争指導者と東條首相を一括りにするのは無理があるのだ。戦後米国の宣伝効果が大であったと云うべきだ。東條さんが責めを一身に負うと決心したことも大きい。

5 東條首相は権力が欲しくて、陸軍大臣、参謀総長等を兼任したのではなく、統帥と国務の密接な連携を図ろうとしたのだと解するべきだ。剛腕東條さんでも、統帥と国務分離という日本の伝統的システムの壁は壊せなかったのだ。

6 政治・軍事リーダーが厳しい評価を受けるのは当然だが、その評価は多面的であらねばならぬし、一面のみを強調すべきではないと愚考する。

7 結局のところ日本的システムの限界を東條大将が背負わなければならなかったということであり、他の誰がその任にあったとしても似たような結果となった云うべきだ。勿論、東條大将に責任なしという訳ではない。己以外の一人に全ての責任を押し付けて、自らは心の安穩を保つと云う日本的無責任主義と我々はそろそろ決別すべきだろう。冷静に東條さんの事績を評価すべき時期に来ていると考える。

(了)